

活用語に接続する「ラシイ」：明治におけるその定着の状態

原口，裕

<https://doi.org/10.15017/12194>

出版情報：語文研究. 31/32, pp.182-196, 1971-10-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



活用語に接続する「ラシイ」

明治におけるその定着の状態

原 口 裕

はじめに

現代語法のなかには、明治の後半期に至って急速にその用法を文献の上にあらわしてくるものがあるが、それらの定着の状態については、記述的研究が必ずしも十分でないことなどあって、不明の点も少なくない。活用語に接続するラシイの用法もその一つである。普通に、明治四十年代がその定着の目安とされているのであるが、明治前期の事例については述べたものがない。本稿では、若干の資料の調査結果を示して、その用法の定着状態を考えるための参考に供したいと思う。

〔注〕

- (1) 松村明「東京語の成立と展開」(『講座 現代語2』(昭和三九)所収)には、「明治四〇年前後の漱石の作品などを見ると、『ラシイ』の用言接続の例がかなり出てくるが、多くは地の文章中に出てきて、会話文の中には、あまり多くは見られない。口語文の用語として発達したもので、この時期までには、まだ、口頭語としては、それほど一般化してはいなかったのではないかと思われる。この種の用法がひろく

行なわれるようになるのは大正期にはいつてからということができる」とある。九〇ページ

同右「近代の文法—江戸語から東京語へ—」(『日本文法講座3』(昭和三二)所収)三三三ページ

同右『古典語助詞助動詞詳説』(昭和四四)第六章九「らしい」(外山映次)二二四ページ

吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』(昭和四六)三三三ページ

一 『いろは文庫』の用例

江戸期においては、活用語接続のラシイの用法は殆どないといわれている。杉本つとむ氏は、西鶴の作品に動詞接続のラシイがあらわれ、「語史的に従来の説を改正する材料となる」と述べられたことがあるが、近刊の『日本語 歴史文典試論』(中)(昭和四五)では、江戸前期に関して、湯澤幸吉郎氏の指摘された『好色盛衰記』の例を引いてその用法を一般的でないとし、江戸後期では、これも湯澤氏の『いろは文庫』の例をあげて、

「現代語へは程遠いようである」とされている。⁽³⁾この期の用例の検索の極めて困難な事実を示すものであろう。

宣長はその『古事記伝』で、「三つ栗の中つ枝のはつもり赤ら嬢子をいざささば余良斯那」(応神記)の「余良斯那」について、良斯は斯具札降良斯など常に云良斯にて、俗言に某らしき^{モトヲ}と云言と全同じ、(「されば、時雨降らしは、俗言に時雨が降らしき、時雨が降さうなと云ことにて、時雨の降さまに思はる、なり、凡て此辞はみな此意なり、」)されば余良斯は、俗言に好きさうなと云意なり。(傍線筆者)

と説明している。これによると、当時の京都辺の口頭語に動詞接続のラシイが存在したことを思わせるのであるが、『記伝』の他の箇所では、「らし」はすべてサウナと訳されている。『古今集遠鏡』も同様で、例言の「時雨がフルサウナ」以下サウナ一本立てで、その口訳に例外はない。宝暦より寛政にかけての上方洒落本などにも、活用語接続のラシイは皆無である。宣長の俗言を実例でもって検証することができない。後述するように、サウダの動詞接続とは性質が異なり、ラシイが普通の動詞に直接接続する形は、本来の口頭語系のものでなく、文語よりの類推形と考えられるものであるから、その俗言の性格の解明は、実例を見出すまで保留せざるを得ないようである。

幕末に至るまでの資料では、湯澤氏のあげられた『いろは文庫』の「あの〇〇さんは、おぬしに余程気があるらしい」(七〇回)が唯一の例として知られ、諸概説はすべてこの例を引用している。湯澤氏は「一例しか発見しない」と述べられた。しかるに、『いろは文庫』には、次に列挙するように、他にもいく

つかの用例があつて、この資料を看過することができないのである。

(イ)ヤイく、吉や此方先へ行くぜ。其方の様に足が遅くつちやア追付て看る事ア不出来ぜ。アレく向へ行くさうだア。
(三編一六回、一二五ノ八)

ソリヤくまた前路の方へ帰るさうだぞ。怪我をするナ、あぶねへく。(同右、一二五ノ一〇)

「アハ、くくく、夢中になつて居るさうだ。」トいはれて気の付く逸助が、(三編一七回、一二八ノ二)

彼二文字屋の娘お軽の家の丁稚が、門口を朝早く掃除するとして、脇差の落てありしを拾ひ、「ヲヤく脇差を落して行つた人があるさうだ。」(四編一九回、一四五ノ八)

イヤ夫は左様と、モウ日が暮ますさうな。秋の日は少しの間も油断が成ませぬ。(五編二七回、二〇一ノ三)

ソラく最う勝負がはじまるさうだ、空言をいつて居ねへで、宜く見物をするがいひやア。(一一編六三回四五三ノ二二) 切合がはじまりますとネ、その中に内の寒助が交つて居まして、自分も何処研られたさうで、血だらけになつて居ながら、(二編六七回、四八〇ノ四)

(ロ)コレサ、そんな声をして万一間へると宜くないはな。何でも那内義さんは、おぬしに余程気があるらしいぜ。(二編七〇回、五〇〇ノ一〇)

まア那分じやア大丈夫、そんな気は何所へかなくなつて仕舞たらしい。(三編七八回、五五七ノ一一)
お腹も餘程大きくなつて、乳が黒くなりました処では、最

う大かた五月ちかくなつて居るらしく見えますが、貴公あんな事をなすつて、何様為やうと思し召しますエ。(一四編八三回、五九五ノ四)

実は鹽谷の浪人で、其内に大星といふ人も交つて居るらしいが、名を変へて居る様子だから分りかねると咄して聞せた人がございまして、夫が実正なら大変だが、(一五編九〇回、六四七ノ五)

『いろは文庫』における、サウダとラシイの推定の全用例であるが、すべて会話中の例である。一二編では一編中にサウダとラシイの混用が見えるが、七〇回を境にして、前後にその用例は截然と分かれていて興味深い。『いろは文庫』に見える語法が、一・一・一二編の前後で異なる分布をしている場合のあることはかつて指摘したことがある。その刊年は四編(天保二)以降不明で、一八編(明治五)に及ぶが、この用例の分布の状態は、恐らくは、幕末から明治へかけての口頭語における実情を背景としているように思われる。二世春水(文政元年生)より後に生まれている仮名垣魯文(文政二年生)の戯作では、『滑稽富士詣』(万延元—文久元)『西洋道中膝栗毛』(明治三九、総生寛作一二編以降も含めて)『安愚楽鍋』(明治四—五)『胡瓜遣』(明治五)などで、活用語接続のラシイの例は皆無であるから、『いろは文庫』の用例はその数からも貴重である。幕末より明治にかけての口頭語で、その用法が徐徐に醸成されつつあったと考えることができる。

(注)

- (1) 杉本つとむ『西鶴の文体と語法』(『近代日本語の新研究』(昭和四二)所収)六九六ページ
- (2) 湯澤幸吉郎『徳川時代言語の研究』(昭和一一)四四〇ページ
- (3) 杉本つとむ『日本語 歴史文典試論』(中)(昭和四五)二九五ページ、三〇五—三〇六ページ
- (4) 『古事記伝』三十二之卷(文政五刊)、筑摩版全集第十一卷四八四ページ。佐田智明氏の御教示による。記してお礼申し上げる。
- (5) 筑摩版全集第三卷一〇ページ
- (6) 湯澤幸吉郎『江戸言葉の研究』(昭和二九)五一—二ページ
- (7) テキストは京都府立総合資料館蔵の版本を用いた。便宜のため有明堂文庫のページ数と行数を付記した。
- (8) 拙稿『「ノデ」の定着』「静岡女子大学研究紀要」四号(昭和四六年三月)三六ページ

二 明治前期

明治前期の資料では、ごくわずかの用例が諸書に散見するだけのようである。『新聞集成明治編年史』によれば、俗文体の文章で、(イ)万世橋の南の樹木の際で、八九人の車夫が寄り集まつて車の上へ錢や札を並べ、何か的中ものをしている傍に、柿を喰ひながら、うろ／＼して見張りをしているらしい者も見えました。(明治八年一月九日、東京日日二卷四三—四四ノ三二)

(ロ)此節大坂では、銅貨一厘錢の相場が十圓に付八十錢と迄騰貴し故、是迄拂底の処尚々種切になり、此原因は奸商等の仕業にて沖繩県へ輸送するとか言ふらし。(明治一三年二月一七日、いろは新聞、四卷二六七ノ四ノ二九)

の、口語文体と文語風文体との両様の例が見える。新聞類の調査は行なわなかったが、こまかな詮索をすればかなりの用例が期待されよう。^(編一)ここでは(四)の文語調の用法が注意される。

江戸期においても、推定のサウダの使用は、資料の分量に即して見れば、頻度の上ではあまり多くはない。春水の『春色梅児誉美』(天保三十四)で、

松兵へは行衛しれず、段々久八が難義するそふだ。(初編

一齣、五一ノ一二)

そりやア、がたいそふ烟る。出前でも沢山焼そうだ。(初編六齣、八七一ノ一二)

ナニモウはやくはねヘヨ。みんながそろ／＼出かけるそうだ。(三編一八齣、二八四ノ一二)

ヲやいつそ苦勞をさしたそうで、おやせなはいましたは。(四編二四齣、二三四ノ一〇)

の四例くらいであるし、滝亭鯉丈の『八笑人』(文政三十一弘化四)でも、

おだるさん早く行ナ、坊がどうかしたそふだ。(二編上、八八ノ九)

ヅブ生木だそうで烟ツてばかり居るは。(二編下、九八ノ一)

コウ／＼だれか見て居たそふだ。(二編下、一〇二ノ九)

もう／＼口から先へ産まれたそふで。(三編上、一六九ノ三)

赤貝なんぞにや克きくさうだはどうだ。(五編上、二七六ノ六)

右の諸例が見えるくらいである。『いろは文庫』にしても、一八編五四冊の作品である。しかも、

あの金貨の金兵衛は(中略)今ぢやあかなりの金満家、酷

い高利を貸すさうだが、因業といふ渾名を取るだけ、めつぽふ出世したそうだ。(黙阿弥『水天宮利生深川』(明治一八)序幕、一三五ノ下ノ二)

のように、散切物の脚本で、伝聞と同居して用いられたり、また、

若夷さんとやらのお祝ひで濱町の家元が連中を連れて来ますさうだ。(同右、二幕、一五三ノ上ノ一二)

イヤ不整然お話を致して居る内に、兩がやんださうでございます。(岡本純『保安條令後日之夢』(明治二二)二回、一七〇ノ下ノ三)

のように、マスサウダ・サウデゴザイマスの敬体が確立している、依然として使用されている明治二十年代までの環境では、客観的な事態の推測にかかわる、主観性の弱いラシイが、しばしば口頭語にのぼるほど熟成していなかったことは当然考えられることである。

一方、文語法では、終止形接続の「らし」は最も初等の段階で教授されもし(例えば文部省編『単語編』(明治五)の活用表のごとき)、

取糸のけふのさかえをはじめにてひき出すらしくにのとみをか^三

のように、万葉調用語のことさらの使用がなくても、国学者流の賀歌では「らし」が用いられたりしている。

その語性と使用の頻度及び文語使用の伝統的背景に関連して、既に指摘されているラシイの文章語的性格が形成されたと考えられる。(四)の用例は、口語的用法の伸長を支えとしての文語的

法を示しているといえよう。

この時期の小説での用例も多くはないが、

(イ) オ、其曲者で思ひ出したが此茶店の婆さんハ先きから外してゐるらしいが東京者だけあつてぬかりハないがモシ先生屹度一癖ありますぜといふ所へ、(岡本起泉『嶋田一郎梅雨日記』(明治二二) 二編中、七五ノ上ノ七)

(ロ) 浩爾が泰然驚く色なく。借金の淵に日を暮るも。其融通のさすがにも。尚おこなはる、故なるらし。(坪内逍遙『当世書生気質』(明治一八一九) 四回、七六ノ上ノ一三)

向洲の堤ながしと雖も。山媚水明かねそなはり。且納涼に便利よきハ。彼の水神の八百松なるらし。(同右、八回、九五ノ上ノ三)

の両様の例があつて対応し、やがて二十年代の知識人の文章に定着してゆく姿を見せる。

(注)

(1) 使用テキストは末尾にあげた。四三二ノ四ノ三二は四三二ページ四段三二行目の謂である。

(2) 『日本教科書大系 近代編四巻』所収、三七―三八ページ

(3) 富岡製糸場行啓の皇后宮に奉った福羽美静の歌。(明治六年七月二十六日、東京日日、『明治編年史』二巻、五八ノ三ノ二四)

三 俗語文法書でのとりあつかい

ここで、明治の俗語文法書におけるその記述をながめてみた。

ホフマンの『日本語文典』(明治元、三沢光博氏訳による)では、派生形容詞のラシイ(体言に接続する)をあげて、推定の用法にふれていない(一六九―一七二ページ)。サトウの『会話編』(明治七)も同様で、サウダを、

Soda: appearance is = it appears that (Notes, p. 62)

と説明しているが、ラシイをあげない。サトウ・石橋政方の『英和俗語辞典』(明治九)では、*seen* について、

also expressed by *rashii*; *sô da, yô (c) da, as, it is true, makoto - rashii*; it is that there was, *atta sô da...* (p. 276)

と用例をあげて、従来の用法をのべる。二版(明治二二)も同じである。この傾向は下つて、チェンバレンの『A Handbook of Colloquial Japanese』(明治二二)も全く同様で、*adjective of probability* には、*it would seem that "they say that"* にサウをあげてラシイにふれることがない(一八三―一八四ページ)。サトウの記述は当代の実情の一面を示すものであろう。

終止形接続のラシイをあげる早い俗語文法書に、佐藤誠実『語学指南』(版權免許明治九、明治二二刊)がある。その「俗言活用図」(巻四、四二―四三頁)には終止言に接続する語として、ラシイ・ベイ・マイ・ト・ナア・ナをあげている。しかし、ラシイについては、「多く東京ノ言ヲ用ル」た俗言の実例を欠き、ラシモ現在ヲ推量スル詞ナリ、其ノ意ランニ似テ緩シ、サウナト訳ス、(巻四、二二頁)

と説明している、活用図と対応しない。里見義の『雅俗文法便覧』(明治一〇)も同じく、「平常語の図」には連体言に接続するマイ・タロウ・ラシイをあげるが、(一四―一五頁)、「文章語・平

常語対照」の例に、

文章

有ラン 有ラメ 有為 哉 而有ン

平常

ダラウ タラウ サウナ ナアト シタラシ

と図示して(二七ウー九オ)、「らし」にはサウナが配置されている。これらも、文語による理解と口頭語における実情との相違を示すものであろう。以後、ラシイを文語の「らし」の近

体として説く、落合直文・小中村義象『中等日本文典』(明治三三、落合直文『日本大文典』(明治三〇)もほぼ同文)、山田美妙『日本大

辞書』(明治二五)がある一方、文語口語の対訳で「らし」にサウナをあてる、拝郷蓮茵『ちまたの石ふみ』(明治二二)、鈴木弘恭

「百人一首一口話」(女学雑誌一〇一号、明治二二年三月)などがあつて同じ系列をなし、この時期に活用語接続のラシイを実例をあ

げて説いたものはないようである。高津敏三郎『日本中文典』(明治二四、明治二六訂正六版によった)のごときは、「花もさかん・花

もさくらん・花もさくらし・花もさきなん」を一括して、「花モ咲クダロウ」と説いたりしているのである(六六ページ)。

明治三十年代に陸続と刊行された俗語文典になると、

松下大三郎『日本俗語文典』(明治三四)一五五―一五八ページ

いしかわくらじ『はなしことばのきそく』(明治三四)八九、

九三―九四ページ

石川倉次校閲同文館編輯部『国語科 教授用口語文典』(明治三四)三九、

五六ページ

金井保三『日本俗語文典』(明治三四)一一一ページ

小林稲葉『新日本俗語文典』(明治三五)五一、五九ページ

吉岡郷甫『日本口語法』(明治三九)一一一―一二三ページ

小林左文二『日本語法提要』(明治四〇)五四―五五ページ

教科書を含む右の諸書はすべて、活用語接続のラシイの用法にその項目をあてている。これは、次節に述べるように、明治二十年代後半におけるその定着の状態をふまえたものと見られ、俗語文法書における記述の変化が、この語の用法の伸長を如実に示している。

〔注〕

(1) 永野賢「文章の原理」(9)「月刊文法」(昭和四五年三月)には、『雅俗文法』(明治一〇)の「平常語の図」がのせてあり、『同便覧』と同様であるが(一三〇―一三二ページ)、『雅俗文法』の「文章語・平常語対照」については未見。

四 明治後期

明治二十年代に入ると、活用語接続のラシイの用法は、かなりの実例を小説類に見出すことができるようになる。これを、

- (一) 二二年を中心とした言文一致体小説における状態
- (二) 二六年ころまでの文語調文体の小説における状態
- (三) 二八年以降の状態

の三項にわけて示すと次のようになる。

〔表Ⅰ〕

著者	作品	刊年	(連用形) らしい	(終止形) らしい	(連体形) らしい	計	テキ スト
二葉亭四迷	浮雲	二〇	1	3 (1)	1	6	②
山田美妙	武蔵野	二〇		1		1	③
矢崎嵯峨の舎	胡蝶	二三	1			1	③
	初恋	二三	1			1	③
	野末の菊	二三			1	2	④
麻溪居士 (喜多川金吾)	真才子	二三			1	1	
須藤南翠	緑簑談	二二			(1)	1	①

〔注〕

() 内の数字は、会話文、心中語の例数である。(以下の表も同じ)

テキスト①筑摩版明治文学全集所収

②講談社版日本現代文学全集所収

③筑摩版現代日本文学全集所収

④改造社版現代日本文学全集所収

その他は末尾にあげる。

『緑簑談』は、書生あいての会話文にあるもので付記した。四迷の『あひゞき』『めぐりあひ』(明治二二)、鷗外の『緑葉』

歎『玉を懷いて罪あり』『新浦島』(明治二二)、巖谷小波の『五月鯉』(明治二二)などには例がない。(表Ⅱ)の事例をもあ

わせて、この時期によく文章語に登場することがわかる。
『浮雲』の心中語の例は、

それは勿論彼娘だッて口へ出してこそ言はないが何んでも
来年の春を楽しみにしてゐるらしいから、今唐突に免職に
なつたと聞いたら定めて落膽するだらう。(一編四回、二三
九ノ上ノ四)

とあるもので、口頭語におけるこの用法の伸長をうかがわせる
が、小説などでは殆どあらわれない。これは、マスラシイ・ラ
シイデスの敬体がいまだ形成されていなかったからでもあるう。
而も思へば夢の田舎は神奈川……栗殻に故里といふ……神
奈川らしいです。(山田美妙『さすがに雙紙』(女学雑誌一三三
号、明治二年一〇月)八篇、二〇ノ下ノ七)

是は此人の癖らしいです。(御室『婿えらび』一回、五三ノ下ノ一七)
は珍らしい例で、デス体における作爲的用法であらう。

円朝の落語に全く事例が見えないことも参考になる。言文一致

〔表II〕

著者	作品	刊年	らしく	らしく	らし (終止形)	らし (連体形)	らし (已然形)	計	テキ スト
坪内逍遙	細園紙幣の君	二三				1		1	②
尾崎紅葉	履歴ばなし 南無阿弥陀仏	二四 二二	1			1(キ)		1	⑤

体の作品でも、敬体があらわれるのは、

落ちる勢力が緩んで、水にもヒドク当らなんだらしかつた
でした。(桜井鴎村『初航海』(明治三二)二五三ノ上ノ七)

ブランデーの樽らしかつたでした。(同右、二五五ノ下ノ二六)
パンドラ号の厭がる軍艦らしかつたでした。(同右、二六〇
ノ下ノ一五)

どうしても飲料水に關したことらしかつたでした。(同右、二
九一ノ下ノ一五)

然し、幾分か私には適當して居るらしいですよ。(永井荷
風『野心』(明治三四)四三七ノ一五)

のように、三十年代に入つてからのようである。『緑簑談』の、
妾の見ました処でも、日耳曼の中にハ大略貧賤の人であり
ましたらしいのハ、能く元の家だといつて庭に保存してあ
るのを見かけますものを。(前編一回、二五九ノ下ノ九)

も演説調の会話中にあり、口頭語の例とするのは躊躇される。

(し)はラシ、(キ)はラシキの数である。テキスト⑤春陽堂版明治大正文学全集所収紅葉全集(博文館版)

明治四二年九版によった。初出の本文と異なるが異同を検していない。）露伴全集（岩波版、昭和五年版）

— 190 —

〔表Ⅱ〕によると、(イ)使用者が交替の時期にあること、(ロ)新しい用法が文語調文で生まれていること、(ハ)二四一・二六年前に用法が定着しつつあったことなどの事実がわかる。

(イ)については、篁村（安政二年生）露伴・緑雨（ともに慶応三年生）が比較される。言文一致も試み（『駆落の駆落三回など）、戯作調が勝った篁村の文章に却って用例が見えないのは、やはり年齢の差であろう。緑雨では、言文一致体の『油地獄』（明治二四）に例がなく、

謂はゞ苦味走つたる男振相応に泣かせやすとも云たいらしく、（『鶉網』（一）、三七ノ下ノ一四）

アハ、お説はいつも美事だが實際へ行くと大いに齟齬する奴サあんまりお遣ひなさる方でもないさうだ。（同右、三八ノ下ノ三）

のように、地の文と会話文で両様の用例があらわれたりする。露伴の文章に用例が多いのは、作品の分量にもよるが、篁村にくらべるとやはりその使用に抵抗がなくなっていることを思わせる。(ロ)については、形容詞接続のラシイの例があらわれるこ

〔表Ⅲ〕

著者	作品	刊年	らしく	らしう	らしかつ	らしい (終止形)	らしい (連体形)	計	デ キ ス ト
三宅花圃	萩桔梗	二八	1			1	1	2	①
川上眉山	大さかづき	二八	1				1	2	①
後藤宙外	ありのすさび	二八	2			1		5	①
人見一太郎	明治の天下	二八	2			11		13	①

と、ラシケレの已然形の使用が見えることがあげられる。

そんな者は玉屋の符牒を洒落本で読む様に心得たが良らしい事（『毒朱唇』全集一、二〇〇ノ一）

多分彼家を顧客に持つて居るには間違ひ無いらしいが、（『風流微塵蔵』ひとり寝（其三）、全集二、一九一ノ二）

又亀井様もそれを知ては居るらしいけれど（『七変化』（一）、全集一、三〇三ノ三）

右のごとくである。「らし」「らしき」の使用も見え、ラシケレは文語よりでた用法であろう。

けについては、表示によってもうかがえるが、紅葉の場合がそれをよく示す。文語調文でまれにしか用いていない彼が、言文一致を試みた『二人女房』でかなりの使用を見せているからである。

口頭語的性格のうちに生れたこの語の用法が、俗流の文語体文章語にも用いられ、文語とのかかわりの中で、やがては口語体文章に定着してゆく状態が、明治十年代からこの時期までの資料によって知られるのである。

勝 海 舟											永 井 荷 風	桜 井 鷗 村	広 津 柳 浪	金 子 春 夢	江 見 水 蔭	
氷川清話	野 心	いちこの実	新梅ごよみ	四 畳 半	花 ち る 夜	闇 の 夜	う ら 庭	を さ め 髪	夕 せ み	薄 衣	三 重 襷	初 航 海	河 内 屋	今 戸 心 中	清 水 越	女 房 殺 し
三〇	三四	三四	三四	三三	三三	三三	三三	三二	三二	三二	三二	三二	二九	二九	二九	二八
	15		10	1		1	1	2	1	4	1	13	10	7	1	2
	1								1			2		1		
12	4 (1)	1	2		1			1		1		2 (1)	2		3 (1)	
	7 (1)		5				1	(1)	2			2			2	
12	29	1	17	1	1	1	2	4	4	5	1	20	12	8	7	2
												①	①	①	①	①

〔注〕テキスト、荷風全集（岩波書店版第一巻）所収

(表Ⅲ)には、明治文学全集(筑摩版)に収める二八・二九年の諸作家の文章、鷗村の少年文学、荷風の初期の小説を比較してみた。

この表の中には、文語体文章もかなりあるが、言文一致体の普及に伴ない、ラシカッ(タ)、デスを後続させる(前出一八九ページ)口語形が見えるようになり、ラシケレの文語形が全く用いられなくなる状態が見て取れる。

二八年から三十年代の前半へかけての伸長が著しい。『女子参政蟄中樓』(明治二〇)や『殘菊』(明治二二、言文一致体)などで用例が見えない柳浪の場合などことにはつきりしている。文語体の『変目伝』(明治二八)に例がないのは紅葉の前期の作品に準じて考えられよう。鷗村では、女学雑誌に掲載した二十年代の文章などあまり例が見えないのも参考になる。

而も此三人の方よりも慥に直助タカ子を認めたらしく、三人共に耻かしそうに直に顔を背けたらしい。『明治の天下』一九回、一三〇ノ下ノ二四

然しまだ其胸の轟きを静め得ぬらしく、凝と眼を開いて居るのである。(中略)而も其の怖しき夢の有様が今は開いた眼の中にも映出されるやうになつたらしい。(中略)彼は少時して、全く沈着く事を得たらしく、軀て廁へ行つてから、(中略)如何も幻影や何かではないと思返すらしく、再び呼吸を凝らして闇の中に佇んだ。(『野心』四九三ノ一五、四九四ノ九)右のように、隣接して使用されるようにもなっている。荷風の『野心』は四〇〇字詰め用紙一四〇枚程度の作品であるから、吉田金彦氏の調査による『破戒』などよりはるかに多用され、

その使用の顕著な作家といわれる漱石や川端康成などに⁽⁴⁾おとらない。

明治三十年代の前半に至って、活用語接続のラシイの用法は、文章語としては十分な定着を見、感情を加えずに、対象から離れて描写するスタイルが確立していた。

ただ、会話文におけるその頻度は低いが、漸増の傾向にはある。『もしや草紙』(明治二二)などの小説では例を見ない福地桜痴(天保二年生)でも、『大策士』(明治三〇)になると、

仔細は知らず、其落付振は、一方の領袖たる政治家の価値はあるらしく見受られたり。(四、九六ノ下ノ三二)

其次に炭鉾を煽り立つた時も、彼奴は連中の仲間だつたらしいネ。(一、九四ノ下ノ二)

のように、文語体文章と共に、口頭語描写にも使用したりしている。「その語調、口吻まで伝える」といわれた新聞談話集の『氷川清話』(続、続々編も含める)なども参考になろう。

[注]

- (1) 活用語接続のラシイデスは例を見出していない。
- (2) 落語速記の例を付記する。
併し明日屹度来ないと肯ないヨ……何だか来ないらしい子。(三遊亭円遊『転宅』花がたみ三号(明治二二年一月)所収、二〇ノ二三)
- (3) 調査した資料の作品は、『当世商人気質』(明治一九)、『むら竹』四・八・九・一〇・一一・一二・一四・一六・一八(明治二三・二四)所収の小説二九編である。
- (4) 吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』(昭和四六)三三・三三・三四ページ

五 上接語の性格

『いろは文庫』より明治三十年代に至る活用語接続のラシイ

〔表Ⅳ〕

計	シ(時・文語)	タイ(希望)	ナイ(打消)	ザル(同右)	ヌ(打消・文語)	ヨイ(良)	ナイ(無)	普通動詞	イフ(云)	スル(為)	アル(存在)	ナル(指定)	デア(ニテアル)	テアル	テキル・テル	タル(文語)	タ(時)
9									1		1	2			4		1
90	1	1	2	1	4	2	2	9	1	3	6		1	1	20	8	28
98			2		3		2	2	1	1	10		1	1	24	2	49
66			2		3		2	4			1	3		2		11	38
263	1	1	6	1	10	2	6	15	3	5	20	2	4	2	59	10	116
計																	

の用例を、その上接語について整理して示すと〔表Ⅳ〕のようになる。

〔注〕

- 表Ⅰ・Ⅱ・表Ⅲの欄には当該年代のカードの総計を記した。若松しづ子・田沢稲舟など上述しないものも含むため、数字は一致しない。作品名は省略する。
- 表Ⅲより荷風を除いて別に記した。
- 普通動詞とは、当ル・歌ウ・思返ス・思ウ・気ニカカル・記ス・配ル・来ル・呉ル・心配スル・住ム・続ク・慰メル・惚レル・行クの一五語各一例である。

右の表によれば、時の助動詞タ・タルに続く形が全体の四割を占め、存続態・存在態（テイルール）を加えるとその八割に及ぶ。これによると、ラシイは、客観的に存続していた事態や、存続している事態についての推測をするその用法を、發生の当初から上接語に端的に示している。

形容詞のナイや、打消の助動詞のヌ・ザル・ナイに接続する用法も、靜態的な状態表現にかかわることから發生したのであらう。そのために、アリの場合に、

小萬の言葉は吉里にも善吉にも意味あるらしく聞えた。（『今戸心中』（九）二一ノ下ノ二四）

お弓は意味あるらしく重吉を見た。（『河内屋』（八）九四ノ上ノ一五）

右のように、屬性や状態を示す用法も生じて、体言接続のラシイ（接尾語）に類似してくる。

したがって、前述した推定のサウダが多く動詞に直接に接続するのに対して、普通動詞に直接接続するラシイの形は、本来の口頭語の用法として出てきたものとは考えられない。新聞語に見た「云ふらし」の例をはじめとして、その多くが、紅葉・簗村・露伴などの文語調文体に用いられている（当ル・云ウ・2・歌ウ・思ウ・氣ニカカル・来ル・呉ル・心配スル・スル3・惚レル・10語三例）事実よりも、一方では口頭語での用法の發達を支えとし、文語への類推で、文章語において生じたものと考えられるのである。サウダに比して更に使用頻度が低くなることも、活用語接続のラシイの用法の發達を遅らせることになったであろう。二十年代までの俗語文法書で実例をあげないのもそのため

であらうし、宣長の「時雨が降らしき」の俗言性が疑われる所以でもある。

しかし、三十年代に入ると、普通動詞接続の形も漸増の傾向にあり、

所が段々様子を聞いて見ると、どうも西郷を刺しに行くらしい。（『続々水川清話』二七ノ一二）

この日は、数週間続くらしいが、（『初航海』二六回、三〇六ノ下ノ一八）

のように、あり得る事態の予測をする用法もあらわれてくる。その急速な伸長は現代語法形成過程での一つの特徴としてあげることができよう。

むすび

近代文章語や現代語法の形成については、明治における俗流文語調文体と口頭語との干涉の事情が記述的に明らかにされる必要がある。ラシイの用法のごときはその典型の一つである。以上略説してきた、幕末より明治三十年代に至るその史的経過は、不十分な資料の単純な統計的表示にすぎないのであるが、特色ある定着の状態はおおむね概観できたように思う。

——一九七・七・一五——

（テキスト）

春色梅児誉美（日本古典文学大系六四）八笑人（岩波文庫） 水天宮利生深川（筑摩版明治文学全集九）保安條令後日之夢（明治文化全集二一）嶋田一郎梅雨日記（明治文学全集二） 当世書生氣質（明治文学全集一六） 真才

子（女学雑誌一六六号）婚えらび（改造社版現代日本文学全集一〇）権妻の果（むら竹一〇巻、明治三年一〇月八二ページ）氷川清話（吉本襄編『幕末維新史料叢書二』）大策士（明治文学全集一一）

〔補注〕

(1) 新聞語の用例を付記する。

今日に至りては数年の迷霧漸く晴れ、朝廷の有難いと云ふことに氣の付いたらしい者を往々見掛ると、是七月十九日頃の景況なりと該地よりの報知、『明治編年史』三巻、二六二ノ四ノ三、明治十年八月一日、東京日日

(2) 改稿『奇遇』（明二九）には、タラシイ（1）キルラシイ（2）の用例があつて、その推移を反映している。

(3) トルストイ作不知庵主人訳『涙涙』（『国民之友』一九九―二一〇号、明治二六）では、言文一致体で、タラシク（7）、タラシカッタ（2）、キルラシク（1）の用例が見えて、同様の傾向を示している。

受贈雑誌 46年4月―46年9月 I

古典と近代文学（有精堂）9・10／愛知県立大学文学部論集21／女子大文学（大阪女子大学）22／県大国文（愛知県立大学）5／薩摩路（鹿児島大学）15／女子大国文（京都女子大学）60・61・62／人文科学紀要（東京大学教養部）51／青山語文（青山学院大学）創刊号／學苑（昭和女子大学）374・375・376・377・378・379・380・381／国文学―解釈と教材の研究―（学燈社）16巻4・13号／一橋論叢第64巻6・65巻1・5号・66巻1号・3号／国語国文（京都大学）40巻2号・9号／文芸研究（明治大学）23・25／半獸神（大阪）2号／佐賀龍谷学会紀要（佐賀龍谷短大）17号／鶴見女子大学紀要8号／滋賀大國文8号／古典評論（東風の会）7／日米フォーラム（米国大使館）17巻2・4号／国文白百合（白百合女子大学）2号／研究年報（学習院大学）17輯／文学研究（九州大学）68輯／甲南国文（甲南女子大学）18号／国学院雑誌（国学院大学）765・770号／国語国文学（岐阜大学）7号／九州文化史研究所紀要（九州大学）16号／名古屋大学文学部研究論集文学18／国文鶴見（鶴見女子大学）6号／文芸研究（日本文芸研究会）66・67集／文学論藻（東洋大学）45／文芸と思想（福岡女子大学）34号／園田学園女子大学論文集5号／研究論集（北海道大学）1／有明工業高等専門学校紀要6／大妻国文2／親和国文4／人文（京都大学教養部）17／外国文学研究（同志社大学）1／専修国文（専修大学）9／近代文学論（東京教育大学）1・2／文化（東北大学）34巻4／待兼山論集（大阪大学）4／文学論輯（九州大学教養部）18／文献ジャーナル（富士期大）108・114／白路（白路社）26巻3・8